

『セクシュアリティの人口学』(小島宏・和田光平編)

第6章(仮題) LGBT人口の基本的属性(釜野さおり・岩本健良)

第7章(仮題) LGBT人口の意識・行動と関連要因:日本(岩本健良・釜野さおり)に関する資料

資料1 性的指向と性自認のあり方別の人口割合(大阪市民調査より*)

資料2 性的指向・性自認別にみた心身の健康(大阪市民調査より*)

資料3 性的指向・性自認別にみた自殺未遂経験等(大阪市民調査より*)

*大阪市民調査の概要

調査名:大阪市民の働き方と暮らしの多様性と共生にかんするアンケート

調査期間:2019年1月16日(発送)~28日(督促はがきで2月4日まで延長、3月7日到着分まで集計)

調査対象:大阪市在住の18~59歳の15,000人(2018年9月30日時点の住民基本台帳から無作為抽出)

配布と回収方法:郵送配布・郵送回収(ウェブ回答併用)、無記名・自記式

有効回答数・有効回収率:4,285人、28.6%

調査票:55問、14ページ

回答者の属性:出生時性別:女2,517(58.7%)、男1,754(40.9%)、無回答14(0.3%)

年齢:20代以下678(15.8%)、30代1,021(23.8%)、40代1,229(28.7%)、50代1,274(29.7%)、
無回答83(1.9%)

※本調査は、平成28年度~令和2年度 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(一般・基盤研究(B))
「性的指向と性自認の人口学-日本における研究基盤の構築」(課題番号16H03709)の助成を受けて実施したものである。実施にあたっては、国立社会保障・人口問題研究所の倫理審査委員会に審査申請を行い、研究倫理上、問題がないことの承認を受けている。(承認番号IPSS-IBRA #18003)

資料1 性的指向と性自認のあり方別の人口割合(大阪市民調査より*)

出生時の性別【問44】

問44では、出生時の戸籍・出生届の性別をたずねました。「男」が40.9%、「女」が58.7%、無回答が0.3%でした。

図表 I-1 出生時の戸籍・出生届の性別 [n=4,285]



現在の性自認【問45】

性自認については、問45で、現在の自分の性別を、出生時の性別と同じだととらえているか質問しました。問44で出生時の性別に回答した4,271人について、それぞれの選択肢(複数選択可)を選んだ割合をみると、「出生時の性別と同じ」は98.8%(4,219人)、「別の性別」は0.2%(10人)、「違和感がある」は0.6%(27人)、無回答は0.5%(22人)でした。

これらが複数回答であることを考慮して、回答を分類すると4,271人中「出生時の性別と同じ」のみを選んだのは98.6%(4,213人)、「別の性別」と「違和感がある」のいずれかあるいは両方を選んだのは1.1%(36人)、無回答は0.5%(22人)です。

次に、問45で「別の性別」と「違和感がある」のいずれかあるいは両方を選んだ36人に、問45付問で、今の認識にもっとも近い性別をたずねました。

これらの回答を出生時の性別で分けて人数を整理したのが、図表45です。出生時の性別が男で、現在の認識が「女」である人は6人、「その他」と回答した人は6人でした。出生時の性別が女で、現在の認識が「男」だと回答した人は4人、「その他」と回答した人は16人でした。

図表 I-2 出生時の性別でみた、今の認識に近い性別

今の認識に近い性別	出生時の性別	
	男	女
男	1	4
女	6	2
その他	6	16
無回答	0	1
合計	13	23

※問45で「別の性別」と「違和感がある」のいずれかあるいは両方を選んだ36人

図表45-1と図表45-2では、出生時の性別ごとに、問45および問45付問への回答を整理しました。出生時の性別が男(出生時男性)である回答者のうち、「今の認識にもっとも近い性別」が「女」である人は6人と「その他」である人は6人を合わせた12人を「トランスジェンダー」とみなすと、出生時男性1,754人の中の「トランスジェンダー」割合は0.7%となります。また、出生時の性別が女(出生時女性)である回答者のうち、「今の認識にもっとも近い性別」が「男」である4人と、「その他」である人16人の合計20人を「トランスジェンダー」とみなすと、出生時女性2,517人の中の「トランスジェンダー」割合は0.8%となります。

図表 I-3 出生時男性の、今の性別の認識 [n=1,754]

「出生時の性別と同じ」	1730	98.7%	← 「トランスジェンダー」
「別の性別」、 「違和感がある」	13人		
今の認識	男 1	0.7%	← 「トランスジェンダー」
	女 6		
	その他 6		
	無回答 0	0.6%	
無回答	11		
合計	1754	100%	

図表 I-4 出生時女性の、今の性別の認識 [n=2,517]

「出生時の性別と同じ」		2483	98.7%
「別の性別」、「違和感がある」	今	女 2	
	の	男 4	
	認	その他 16	
	識	無回答 1	
無回答		11	0.5%
合計		2517	100%

← [トランスジェンダー]

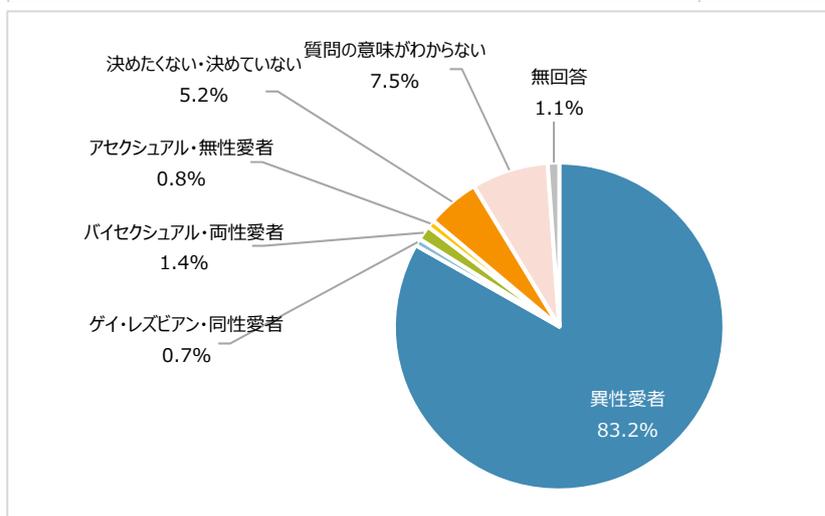
性的指向の認識【問46】

問46では、回答者の性的指向を、図表46に示した選択肢を用いてたずねました。「異性愛者」と回答した人がもっとも多く83.2%

(3,567人)でした。また、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」と回答した人は全体の0.7%(31人)、「バイセクシュアル・両性愛者」は1.4%(62人)、「アセクシュアル・無性愛者」は0.8%(33人)、「決めたくない・決めていない」は5.2%(222人)、「質問の意味がわからない」は7.5%(322人)、無回答は1.1%(48人)でした。

図表 I-5 性的指向の認識[n=4,285]

	%
異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人]	83.2
ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人]	0.7
バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]	1.4
アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人]	0.8
決めたくない・決めていない	5.2
質問の意味がわからない	7.5
無回答	1.1



出生時の性別でみた、性的指向の認識【問46】

性的指向への回答を出生時の性別で分けてみると、「異性愛者」の割合は、男性で84.5%、女性で82.7%です。「ゲイ・レズビアン・同性愛者」の割合は、男性で1.3%、女性で0.3%、「バイセクシュアル・両性愛者」の割合は男性で1.1%、女性で1.7%、「アセクシュアル・無性愛者」の割合は、男性0.3%、女性1.1%でした。また、「決めたくない・決めていない」を選んだ割合は、男性で3.2%、女性で6.5%、「質問の意味がわからない」を選んだ割合は、男性で8.6%、女性で6.8%でした。

図表 I-6 出生時性別でみた、性的指向の認識の回答分布[男 n=1,754、女 n=2,517]

	男	女
	%	%
異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性のみに性愛感情を抱く人]	84.5	82.7
ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性のみに性愛感情を抱く人]	1.3	0.3
バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人]	1.1	1.7
アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人]	0.3	1.1
決めたくない・決めていない	3.2	6.5
質問の意味がわからない	8.6	6.8
無回答	0.9	1.0

回答者の性的指向の分布：区間推定

「回答者の性のあり方」では、性的指向のそれぞれの選択肢について、回答者が「自分にもっとも近い」、として選んだ割合の分布を示しました。この調査は、無作為標本抽出で行われていることから、それぞれの割合について、母集団（大阪市の18歳から59歳の住民）についての区間推定を行うことができます。そこで、(1)回答者全体、(2)出生時の性別が男、(3)出生時の性別が女のそれぞれについて、95%信頼区間を求めました。推定には、Agresti-Coull法（調整Wald法とも言われる）を使用しました（Agresti, Alan, and Brent A. Coull. 1998. "Approximate Is Better than 'Exact' for Interval Estimation of Binomial Proportions." *The American Statistician* 52(2):119-26.）。

「95%信頼区間」とは、大阪市の住民基本台帳から18歳-59歳の人を15,000人無作為抽出する、という作業を、仮に100回行って調査をした場合、そのうち95回については、その選択肢を選ぶ人の割合が、信頼区間95%の上限と下限の間に入る、ということを示しています。たとえば、今回の調査で「異性愛者」を選んだ人の割合は83.24%、95%信頼区間の下限は82.10%、上限は84.33%です。これは、異なる標本を100回取り出した場合、そのうち95回はこの割合が82.10%から84.34%の間に入ることを意味しています。

(1) 回答者全体の性的指向の分布

95%信頼区間は、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」では0.51%-1.03%、「バイセクシュアル・両性愛者」では1.13%-1.85%、「アセクシュアル・無性愛者」では0.55%-1.08%と推定されます。

図表 I-7 回答者全体の性的指向の分布および95%信頼区間

	n	%	95%信頼区間	
			下限%	上限%
異性愛者	3567	83.24	82.10	84.33
ゲイ・レズビアン・同性愛者	31	0.72	0.51	1.03
バイセクシュアル・両性愛者	62	1.45	1.13	1.85
アセクシュアル・無性愛者	33	0.77	0.55	1.08
決めたくない・決めていない	222	5.18	4.56	5.89
質問の意味がわからない	322	7.51	6.76	8.34
無回答	48	1.12	0.84	1.49
合計	4285	100.00		

(2) 出生時の性別が男である回答者の、性的指向の分布および95%信頼区間

出生時の性別が男である回答者の性的指向をみると、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」の割合の95%信頼区間は0.87%-1.97%、「バイセクシュアル・両性愛者」の割合は0.73%-1.77%、「アセクシュアル・無性愛者」の割合は0.14%-0.76%と推定されます。

図表 I-8 出生時男性の性的指向の分布および95%信頼区間

	n	%	95%信頼区間	
			下限%	上限%
異性愛者	1483	84.55	82.78	86.17
ゲイ・レズビアン・同性愛者	23	1.31	0.87	1.97
バイセクシュアル・両性愛者	20	1.14	0.73	1.77
アセクシュアル・無性愛者	6	0.34	0.14	0.76
決めたくない・決めていない	56	3.19	2.46	4.13
質問の意味がわからない	151	8.61	7.38	10.02
無回答	15	0.86	0.51	1.42
合計	1754	100.00		

(3) 出生時の性別が女である回答者の、性的指向の分布および95%信頼区間

出生時の性別が女である回答者の性的指向をみると、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」の割合の95%信頼区間は、0.15%-0.64%、「バイセクシュアル・両性愛者」は1.23%-2.25%、「アセクシュアル・無性愛者」は0.73%-1.56%と推定されます。

図表 I-9 出生時女性の性的指向の分布および95%信頼区間

	n	%	95%信頼区間	
			下限%	上限%
異性愛者	2081	82.68	81.15	84.11
ゲイ・レズビアン・同性愛者	8	0.32	0.15	0.64
バイセクシュアル・両性愛者	42	1.67	1.23	2.25
アセクシュアル・無性愛者	27	1.07	0.73	1.56
決めたくない・決めていない	164	6.52	5.61	7.55
質問の意味がわからない	171	6.79	5.87	7.85
無回答	24	0.95	0.63	1.42
合計	2517	100.00		

※「決めたくない・決めていない」の回答については、主体的にこれらの分類に疑問を持つ、という立場をとる人、自分がどこに当てはまるのか迷っている人、これまで自分の性的指向について特に考えたことがなかったため、他の選択肢を選べなかった人など、さまざまな人が含まれていると考えられます。今後の研究でその意味を探る予定です。

※ここで示した区間推定は、その標本誤差(母集団全体から一部の人(標本)を抜き出して調査することによって生じる誤差)を考慮した結果、行うことができます。ただし、どの標本調査にも共通していることですが、調査にはその他にもさまざまな誤差が生じています。たとえば、調査に回答されないことによる誤差、回答者が質問を読み違えて答えるという誤差、などがありますが、これらについては、数値的に検討・考慮することはできません。

恋愛感情を抱く、性的魅力を感じる、セックスの相手の性別【問47】

問47では、「恋愛感情を抱く相手」、「性的に惹かれる相手」、「セックスをする相手」の性別を、(ア)これまでと(イ)最近の5年間についてたずねました。ここでは、出生時男性と出生時女性に分けて集計します。

男性の「恋愛感情を抱く相手」、「性的に惹かれる相手」、「セックスの相手」をみると、[これまで]についても[最近の5年間]においても、「女性のみ」と答えた人がもっとも多く、おおむね9割前後です。ただし[最近の5年間]の「セックスの相手」が「女性のみ」と答えた人は他より若干低く、86%です。

「女性のみ」の次に高い割合を示すのは、「ない」に該当する回答です。たとえば「セックスの相手」については[これまで]では6.4%、[最近の5年間]では11.2%が「ない」と回答しました。

[最近の5年間]についての回答をみていくと、「恋愛感情を抱く相手」は「男性のみ」が1.4%、「ほとんどが男性」が0.4%、「男性と女性同じくらい」が0.6%です。「性的に惹かれる相手」は「男性のみ」が1.7%、「ほとんどが男性」が0.4%、「男性と女性同じくらい」0.9%です。「セックスの相手」の回答は、「男性のみ」が1.5%、「ほとんどが男性」が0.2%、「男性と女性同じくらい」が0.2%です。

「恋愛感情を抱く相手」、「性的に惹かれる相手」、「セックスの相手」のいずれにおいても、「男性のみ」、「ほとんどが男性」、「男性と女性同じくらい」これらの3つの選択肢をあわせると、2~3%になります。

図表 I-10 出生時の性別が男性の回答者[n=1,754]

恋愛感情を抱く相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	0.9	1.4
ほとんどが男性	0.8	0.4
男性と女性同じくらい	0.7	0.6
ほとんどが女性	2.6	1.5
女性のみ	91.8	89.2
男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない	2.0	5.6
無回答	1.1	1.3
合計	100.0	100.0

性的に惹かれる相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	1.4	1.7
ほとんどが男性	0.3	0.4
男性と女性同じくらい	0.7	0.6
ほとんどが女性	2.6	1.9
女性のみ	92.1	90.8
男女どちらにも性的に惹かれたことがない	1.5	3.1
無回答	1.3	1.5
合計	100.0	100.0

セックスの相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	1.4	1.5
ほとんどが男性	0.3	0.2
男性と女性同じくらい	0.4	0.2
ほとんどが女性	0.9	0.4
女性のみ	89.6	85.5
セックスをしたことがない	6.4	11.2
無回答	1.1	1.1
合計	100.0	100.0

次に、出生時の性別が女性の回答者の「恋愛感情を抱く相手」、「性的に惹かれる相手」、「セックスの相手」をみると、[これまで]でも[最近の5年間]でも、「男性のみ」と答える人がもっとも多く、おおむね8割台です。次に多くみられる回答は、「ない」に該当するもので、とくに[最近の5年間]については、いずれにおいても10%を超えています。中でももっとも高いのが「セックスをしたことがない」で、17.5%となっています。

男性の回答に比べると、[これまで]と[最近の5年間]の差が大きく、後者の「ない」の割合が高いことも特徴的です。

[最近の5年間]の回答に注目すると、「恋愛感情」については「女性のみ」が0.5%、「ほとんどが女性」が0.2%、「男性と女性同じくらい」が0.7%、「性的に惹かれる相手」については「女性のみ」が0.4%、「ほとんどが女性」が0.4%、「男性と女性同じくらい」が1.3%です。「恋愛」と「性的に惹かれる」ことについては、「女性のみ」、「ほとんどが女性」、「男性と女性同じくらい」の3つの選択肢の中では、「男性と女性同じくらい」と答えた人が多くなっています。(ちなみに、図表47-1でみた男性の回答では、「男性のみ」がもっとも多くなっていました。)「セックスの相手」については「女性のみ」が0.5%、「ほとんどが女性」が0.2%、「男性と女性同じくらい」が0.3%でした。

図表 I-11 出生時の性別が女性の回答者 [n=2,517]

恋愛感情を抱く相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	88.2	80.7
ほとんどが男性	5.6	2.4
男性と女性同じくらい	1.0	0.7
ほとんどが女性	0.4	0.2
女性のみ	0.3	0.5
男女どちらにも恋愛感情を抱いたことがない	2.9	13.4
無回答	1.5	2.1
合計	100.0	100.0

性的に惹かれる相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	86.8	80.2
ほとんどが男性	5.4	3.5
男性と女性同じくらい	1.3	1.3
ほとんどが女性	0.4	0.4
女性のみ	0.3	0.4
男女どちらにも性的に惹かれたことがない	4.0	12.2
無回答	1.7	2.2
合計	100.0	100.0

セックスの相手	これまで	最近の5年間
	%	%
男性のみ	88.0	78.0
ほとんどが男性	1.6	0.6
男性と女性同じくらい	0.3	0.3
ほとんどが女性	0.5	0.2
女性のみ	0.3	0.5
セックスをしたことがない	6.8	17.5
無回答	2.5	2.9
合計	100.0	100.0

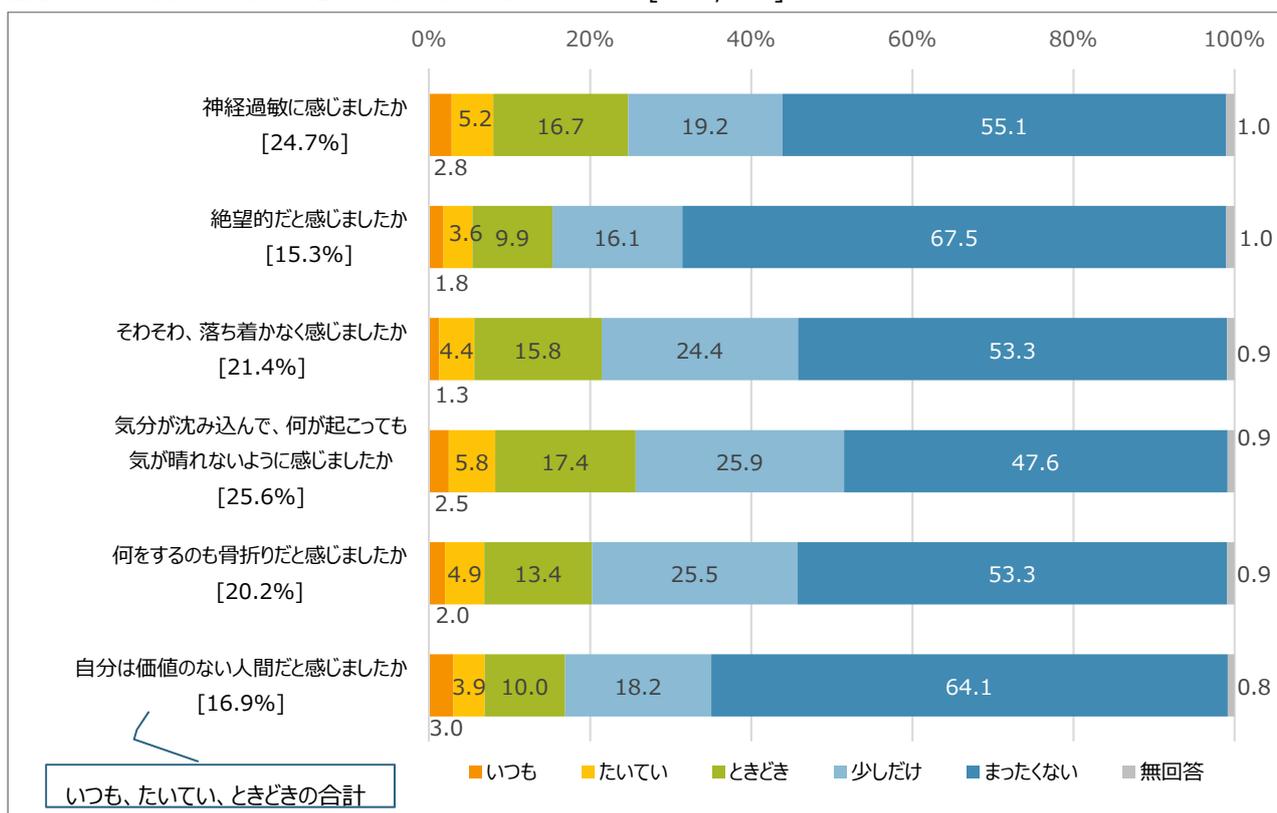
資料2 性的指向・性自認別にみた心身の健康(大阪市民調査より*)

回答者全体の集計: 最近1ヶ月の心の状態【問18】

問18では最近1ヶ月のこころの状態を、「神経過敏に感じましたか」、「絶望的だと感じましたか」、「それぞれ、落ち着かなく感じましたか」、「気分が沈み込んで、何が起ころても気分が晴れないように感じましたか」、「何をすることも骨折りだと感じましたか」、「自分は価値のない人間だと感じましたか」の6つの項目でたずねました。どの項目についても「まったくない」と答えた人がもっとも多く、逆に「いつも」あるいは「たいてい」と答えた人は少なく、「いつも」と答えた人の割合は1-3%、「たいてい」と答えた人の割合は3-6%で、あわせても10%未満です。

「いつも」、「たいてい」、「ときどき」を合わせた割合は、高い順から、「気分が沈み込んで、何が起ころても気分が晴れないように感じましたか」の25.6%、「神経過敏に感じましたか」の24.7%、「それぞれ、落ち着かなく感じましたか」の21.4%、「何をすることも骨折りだと感じましたか」の20.2%、「自分は価値のない人間だと感じましたか」の16.9%、「絶望的だと感じましたか」の15.3%です。経験した人がもっとも多いのが「気分が沈み込む」、もっとも少ないのが「絶望的と感じた」です。

図表 II-1 最近1ヶ月間の心の状態にかかわる事項の分布[n=4,285]

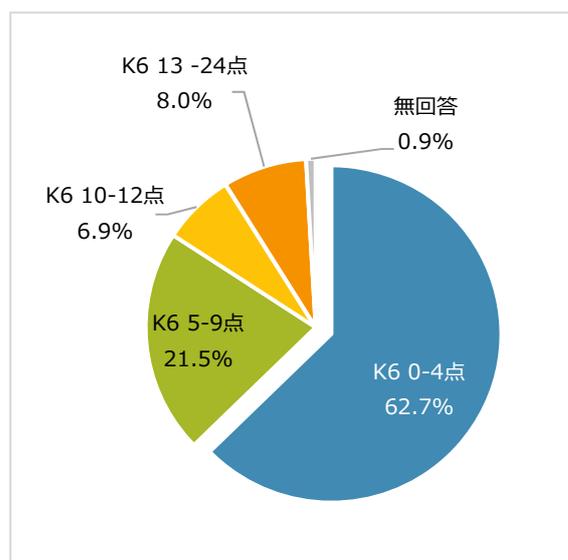


回答者全体についての、最近1ヶ月間の心の状態の指標(K6得点)

前述の6つの項目は心の状態を測定するものとして、広く用いられています。6項目のそれぞれについて、「まったくない」を0点、「少しだけ」を1点、「ときどき」を2点、「たいてい」を3点、「いつも」を4点とし、6つの点数を足し合わせた数値はK6得点とされています。K6スコアの最小値は0点(6項目すべてに「まったくない」と回答)、最大値は24点(6項目すべてに「いつも」と回答)です。

図表 18-1 では先行研究にならい、得点を0-4点、5-9点、10-12点、13点以上に区分し、それぞれの区分にあてはまる人の割合を示しました。各区分に含まれる回答者の割合は「0-4点」の人がもっとも多く、62.7%です。5-9点は21.5%、10-12点は6.9%、13点以上は8.0%でした。なお、5点以上は「心理的ストレスを抱えている可能性」(全体の36.5%)、10点以上は「気分・不安障害に相当する可能性」(全体の14.9%)、13点以上は「深刻な心理的苦痛を感じている可能性」がある(全体の8.0%)とされています。

図表 II-2 K6 得点：区分の分布[n=4,285]



※ K6 は、地域精神保健疫学調査において、うつ病を含む気分障害、不安障害をスクリーニングするために Kessler ら(2003)が開発した尺度。ここでは、橋本(2010)に倣い、3つ以上の項目に無回答だった37人(0.9%)は除外し、無回答が1項目か2項目の人については、回答された項目の平均値を代入し、K6得点を算出した。また、区分については(Furukawa, et al.2008)を参考にしている。

参考文献：

Furukawa TA, Kawakami N, Saitoh M, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*. 2008;17:152-158.

橋本英樹「今後の国民生活基礎調査の在り方についての一考察(第2報)『厚生学の指標』2010; 57(3):1-7.

Kessler RC, Barker PR, Colpe LJ, Epstein JF, Gfroerer JC, Hiripi E, Howes MJ, Normand SL, Manderscheid RW, Walters EE, Zaslavsky AM. Screening for serious mental illness in the general population. *Archives of General Psychiatry*. 2003;60:184-189.

性的指向別、性自認のあり方別にみた、心身の健康

K6の値が(1)[シスジェンダー・異性愛者]と[トランスジェンダー]、(2)[シスジェンダー・異性愛者]と[LGB]、(3)[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBT]、(4)[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBTQA]の間でどのように異なるかをみていきます。

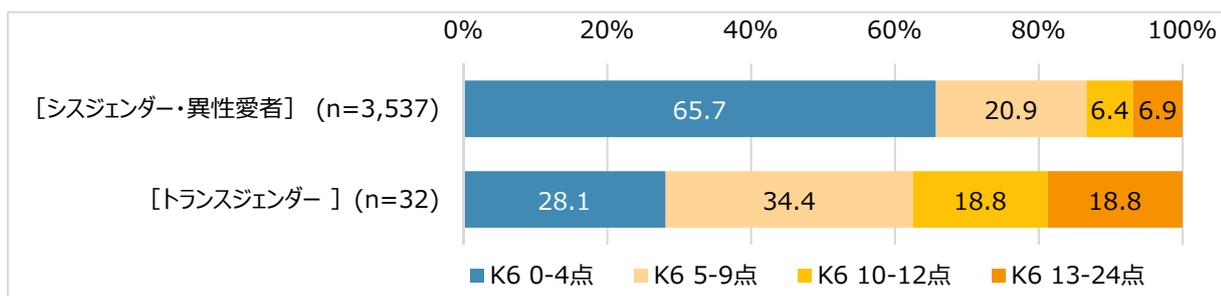
ここではそれぞれを分析上、次のように定義します。

比較上の区分	分析上の定義
[シスジェンダー・異性愛者] 3,561人 (K6では無回答を除く3,537人)	問44の出生時の性別と、問45の現在自認する性別が同じであり、かつ問46の性的指向の問いに「異性愛者」と回答した人
[トランスジェンダー] 32人	問45で「違和感がある」、「別の性別」と回答し、かつ - 問44で「男」と回答し、問45付問で「女」または「その他」と回答した20人 - 問44で「女」と回答し、問45付問で「男」または「その他」と回答した12人
[LGB] 93人	問46で、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」と回答した31人 問46で「バイセクシュアル・両性愛者」と回答した62人
[LGBT] 115人	上記の [トランスジェンダー] 32人と、 問44の出生時の性別と、問45の現在自認する性別が同じであり、かつ - 問46で、「ゲイ・レズビアン・同性愛者」と回答した27人 - 問46で「バイセクシュアル・両性愛者」と回答した56人
[LGBTQA] 142人	上記の [トランスジェンダー] 32人と、 問44の出生時の性別と、問45の現在自認する性別が同じであり、かつ - 問46で「ゲイ・レズビアン・同性愛者」と回答した27人 - 問46で「バイセクシュアル・両性愛者」と回答した56人 - 問46で「アセクシュアル・無性愛者」と回答した27人

(1) [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー]

K6の値について [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー] で比べたところ、[トランスジェンダー]の方が全般に高いことがわかりました。たとえば [シスジェンダー・異性愛者] ではK6がもっとも低い区分である0-4点の割合は65.7%であるのに対し、[トランスジェンダー]では28.1%で、半分以下です。逆に、[シスジェンダー・異性愛者]ではK6がもっとも高い区分である13-24点の割合は6.9%であるのに対し、[トランスジェンダー]では18.8%と2倍以上になっています。これらの割合については、両グループの間に統計的に有意な差も確認されています（[シスジェンダー・異性愛者]、[トランスジェンダー]、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05）。

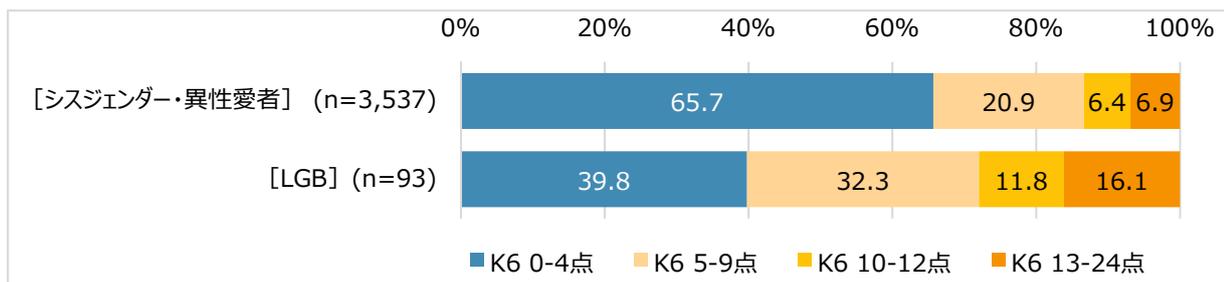
図表 II-3 [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー] の別と K6 の得点



(2) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGB]

K6の値を[シスジェンダー・異性愛者]と[LGB]で比べた場合も、[LGB]の方が全般に高いことがわかりました。[シスジェンダー・異性愛者]の0-4点の割合は65.7%であるのに対し、[LGB]では39.8%と低い割合になっています。逆に、もっとも高い13-24点の割合は[シスジェンダー・異性愛者]では6.9%であるのに対し、[LGB]では16.1%で、2倍以上となっています。両グループの間の割合については、統計的に有意な差も確認されています([シスジェンダー・異性愛者]、[LGB]、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05)。

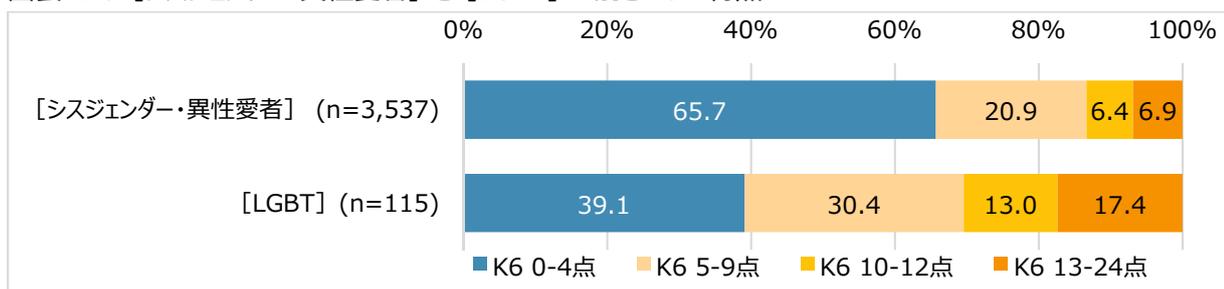
図表 II-4 [シスジェンダー・異性愛者] と [LGB] の別と K6 の得点



(3) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBT]

K6の値を[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBT]で比べた場合も、[LGBT]の方が全般に高いことがわかりました。[シスジェンダー・異性愛者]の0-4点の割合は65.7%であるのに対し、[LGBT]では39.1%と低い割合になっています。逆に、もっとも高い13-24点の割合は[シスジェンダー・異性愛者]では6.9%であるのに対し、[LGBT]では17.4%で、2倍以上となっています。両グループの間の割合については、統計的に有意な差も確認されています([シスジェンダー・異性愛者]、[LGBT]、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05)。

図表 II-5 [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBT] の別と K6 の得点

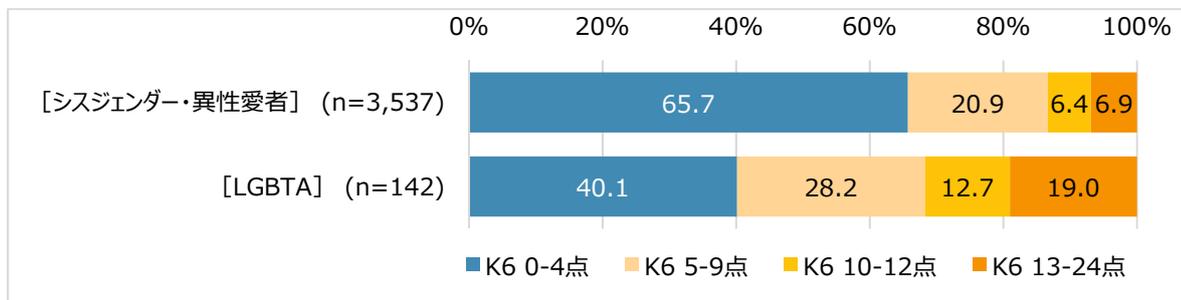


(4) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTA]

[シスジェンダー・異性愛者]と[LGBTA]との比較においても、同様の傾向を示しており、[シスジェンダー・異性愛者]のK6が0-4点の割合は65.7%であるのに対し、「LGBTA」では40.1%と低い割合になっています。また、13-24点の割合は[シスジェンダー・異性愛者]では6.9%であるのに対し、[LGBTA]では3倍に近い19.0%です。これらの割合の間

には、統計的に有意な差も確認されています([シスジェンダー・異性愛者]、[LGBTQA]、その他の3群の多重比較 (Scheffe法)、有意確率0.05)。

図表 II-6 [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA] の別と K6 の得点



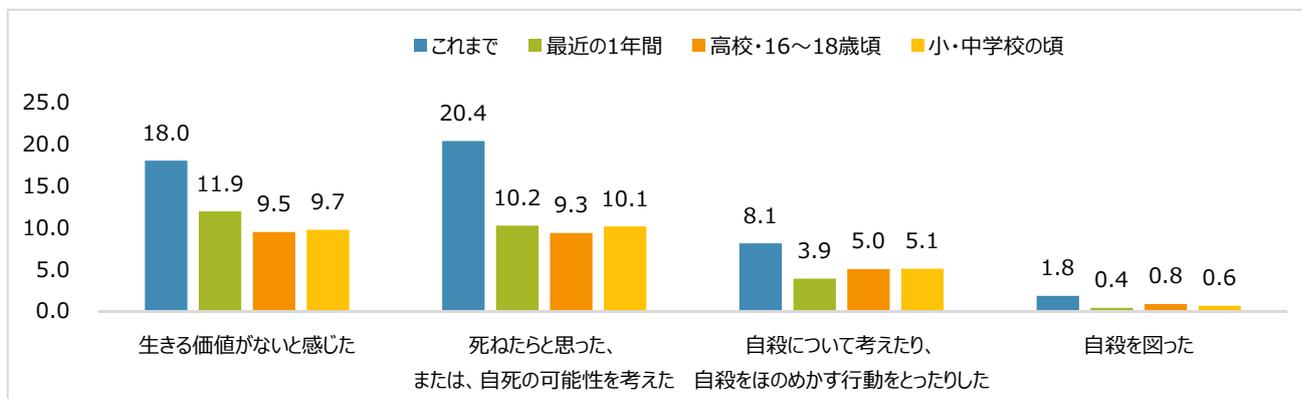
資料 3 : 性的指向・性自認別にみた自殺未遂経験等 (大阪市民調査より*)

回答者全体についての集計 : 希死念慮・自殺念慮・自殺未遂経験【問 19】【問 20】

問 19 では、「生きる価値がないと感じた」、「死ねたら、と思った、または、自死の可能性を考えた」、「自殺について考えたり、自殺をほのめかす行動をとったりした」、「自殺を図った」の 4 項目について、「これまで」の経験の有無をたずね、問 20 では、「最近の 1 年間」、「高校・16～18 歳頃」、「小・中学校の頃」の 3 つの時期のそれぞれにおいて、これらがあったか否かをたずねました。

経験割合をみると、もっとも多いのが「死ねたらと思った、自死の可能性を考えた」で 20.4%、次いで多いのが「生きる価値がないと感じた」で、18.0%でした。これらの 2 項目について、特定の時期に経験した人の割合は、いずれも 1 割前後です。「自殺について考えたりする、ほのめかす行動をとったりした」の経験割合は 8.1%、また、「最近の 1 年間」、「高校・16～18 歳頃」、「小・中学校の頃」でも 4～5%程度でした。「自殺を図った」経験のある人の割合は、「これまで」については 1.8%、各時期においては、いずれも 1%未満でした。

図表 III-1 希死念慮・自殺念慮・自殺未遂経験の割合(「これまで」および時期別) [n=4,285]



※それぞれのことについて、問 19 では「ない」と答え、問 20 のいずれかの時期に「ある」と回答した人を含め、問 19 と問 20 のいずれかに「ある」と回答した人をこれまでに経験したとみなす。

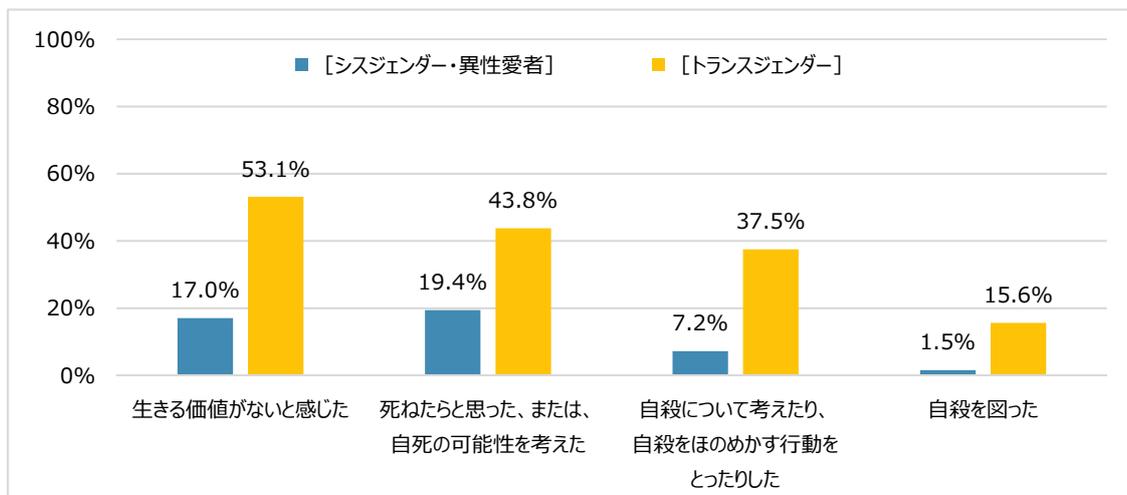
性的指向別、性自認のあり方別にみた、希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験

ここでは、希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験の割合が、(1) [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー]、(2) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGB]、(3) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBT]、(4) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA] の間でどのように異なるかをみていきます。

(1) [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー]

[シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー] でそれぞれの経験割合を比べると、「生きる価値がないと感じた」、「死ねたらと思った、または、自死の可能性を考えた」、「自殺について考えたり、ほのめかす行動をとったりした」、「自殺を図った」経験のある人の割合はいずれも [トランスジェンダー] の方が多く、「自殺を図った」経験については、[シスジェンダー・異性愛者] では1.5%でしたが、[トランスジェンダー] 回答者のうち15.6%に経験がありました。4項目すべてについて、[シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー] の経験割合の間に統計的に有意な差も確認されています（[シスジェンダー・異性愛者]、[トランスジェンダー]、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05）。

図表 III-2 [シスジェンダー・異性愛者] と [トランスジェンダー] の別と希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験
[シスジェンダー・異性愛者 n=3,561、トランスジェンダー n=32]

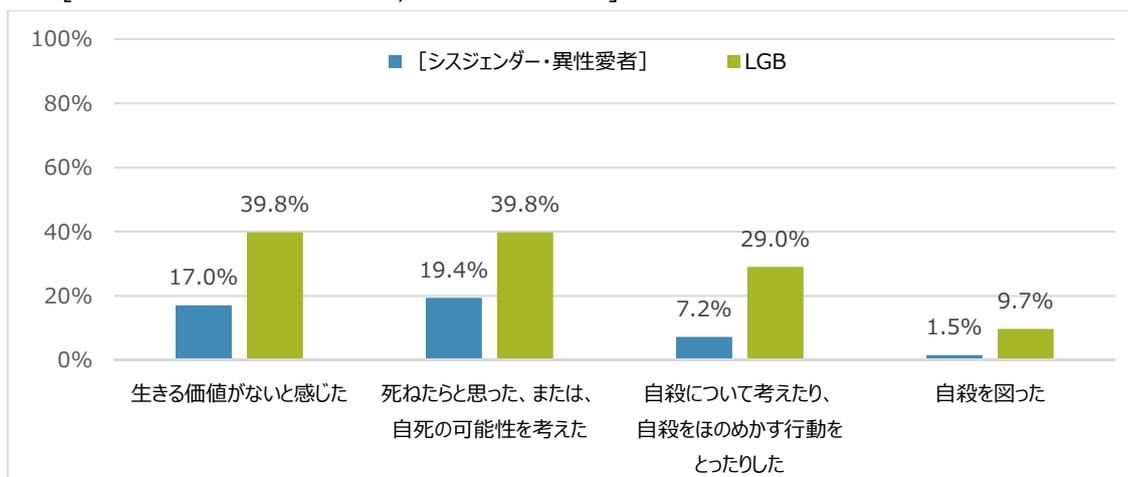


(2) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGB]

[シスジェンダー・異性愛者] と [LGB] で経験割合を比べた場合も、「生きる価値がないと感じた」、「死ねたらと思った、または、自死の可能性を考えた」、「自殺について考えたり、ほのめかす行動をとったりした」、「自殺を図った」経験のある人の割合はいずれも [LGB] の方が多く、統計的に有意な差も確認されています。（ただし、トランスジェンダーに比べるといずれの割合についても LGB の方が低くなっています。）すべての項目について、[シスジェンダー・異性愛者] と [LGBT] の経験割合の間に統計的に有意な差が確認されています（[シスジェンダー・異性愛者]、[LGBT]、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05）。

図表 III-3 「[シスジェンダー・異性愛者]」と「[LGB]」の別と希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験

[シスジェンダー・異性愛者 n=3,561、LGB n=93]

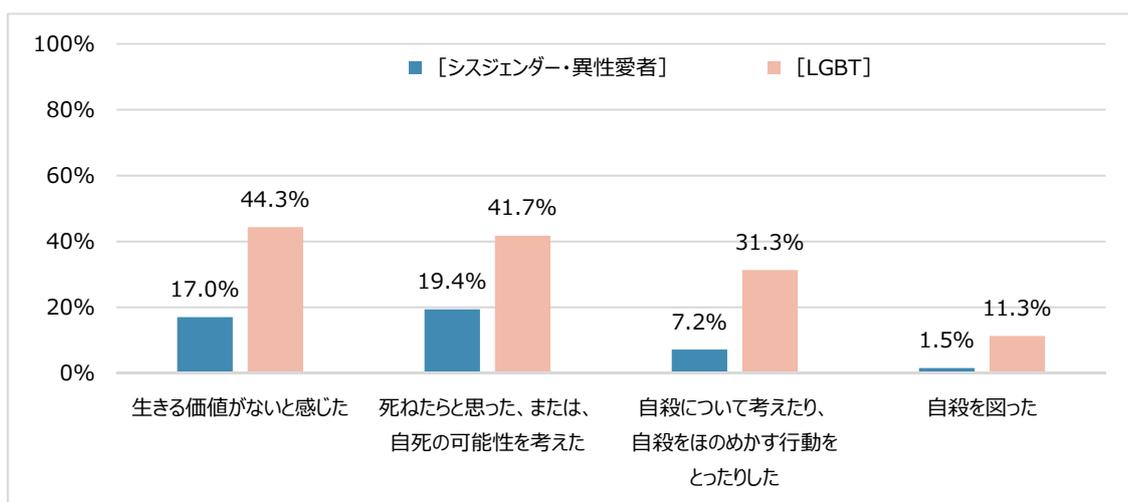


(3) 「[シスジェンダー・異性愛者]」と「[LGBT]」

「[シスジェンダー・異性愛者]」と「[LGBT]」で経験割合を比べた場合も、「生きる価値がないと感じた」、「死ねたらと思った、または、自死の可能性を考えた」、「自殺について考えたり、ほめかす行動をとったりした」、「自殺を図った」経験のある人の割合はいずれも「[LGBT]」の方が多く、統計的に有意な差も確認されています。すべての項目について、「[シスジェンダー・異性愛者]」と「[LGBT]」の経験割合の間に統計的に有意な差が確認されています(「[シスジェンダー・異性愛者]」、「[LGBT]」、その他の3群の多重比較(Scheffe法)、有意確率0.05)。

図表 III-4 「[シスジェンダー・異性愛者]」と「[LGBT]」の別と希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験

[シスジェンダー・異性愛者 n=3,561、LGBT n=115]

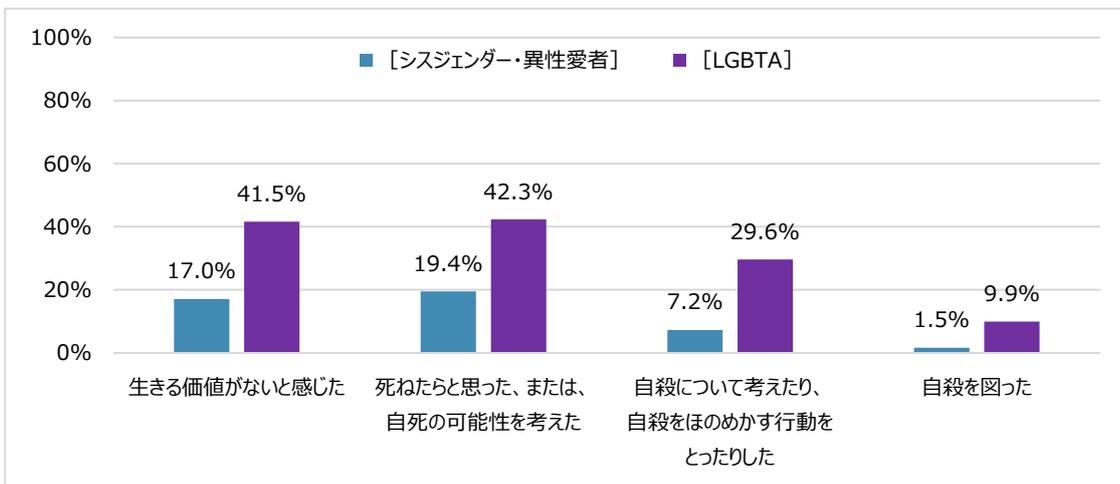


(4) [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA]

[シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA] の比較でも同様の傾向がみられ、[シスジェンダー・異性愛者] よりも [LGBTQA] の方が希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験の割合が高くなっています。全項目について [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA] の間に統計的に有意な差も確認されています ([シスジェンダー・異性愛者]、[LGBTQA]、その他の3群の多重比較 (Scheffe 法)、有意確率 0.05)。

なお、[LGBT] と比べた場合、[LGBTQA] の方が「死ねたらと思った、または、自死の可能性を考えた」経験のある人の割合は高いですが、それ以外の項目については [LGBTQA] の方が低くなっています。

図表 III-5 [シスジェンダー・異性愛者] と [LGBTQA] の別と希死念慮・自死念慮・自殺未遂経験
[シスジェンダー・異性愛者 n=3,561、LGBTQA n=142]



※ 資料2と3では、性的指向と性自認のあり方による統計的有意差の検定結果を示していますが、K6や希死念慮・自殺未遂の経験率に関連する他の要因は考慮していません。今後、年齢、経済状況、からかい・暴力を学校時代に受けた経験、大人になってから受けた経験、周りの人からのサポートの有無、経済状況などとの関連も含め、総合的に検討していく必要があります。